ある戦士の墓標

ある戦士の墓標　１　再会

じょうじ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15491517

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイの大冒険, ダイ大小説50users入り

原作終了から8年後、一度ヒュンケルと付き合ったけど別れてしまったマァムの前に、ヒュンケルが子どもを連れてやってきたという設定です。最後はハッピーエンド予定です。

■以下ご注意ください。
原作終了後の設定です。
オリキャラがいっぱいでます。
全３回予定です。

私のヒュンケルのイメージは「恋愛に程遠かった環境で育ってるのに、なんで愛を語ってるんだろう」「こじらせてるな」「この人、マァムに裏切られたら今度こそ人間滅ぼしそう」「でもツラがいいな」などなどです。

オリキャラがいっぱい出てくるのは、こじらせすぎた彼はもう他人の力を借りないとマァムにたどり着けないと思ったからです。

暇つぶしに楽しんでいただけたら幸いです。

※タイトルを変更しました。
「ある戦士の墓標　１」→「ある戦士の墓標　１　再会」
（7/13）

ある戦士の墓標　１　再会

その人（ヒュンケル）は私の最初の男性（ひと）だった。
戦場以外の場所にあっては、たとえそこが二人だけの暖かな褥（しとね）であっても、息をすることすら罪だと思いっていた人。
彼の胸に確かに触れていたこの手は、彼の心を暖めることはできなかった。
三月（みつき）ほどの苦しい恋の日々は、彼が置手紙一枚を残して突然私の元から去ることで終わり、私は自分の愛の無力さをようやく受け入れた。
それからは他の誰かの愛の奇跡が彼を救うよう、毎日祈りを捧げている。

パプニカの王都より南南西へ馬車で３日ほど行ったところに、その小さな村はある。
小さな村とはいっても、良質の土を産しかつては煉瓦の生産地として栄えていたため、王都への道はその運搬のために石畳で舗装され、戦火を免れた古い建物が多いために、村の景観は小規模な古都という印象だ。

この村の教会に、前任の高齢の司祭の替わりに若い女性僧侶が５人の孤児たちと住み始めたのは今から８年ほど前。

ともすれば閉鎖的な村人たちが快く彼女たちを受け入れたのは、この村が王都から遠いがために魔王軍の侵攻を受けなかったことから

くるおおらかさに依るところが大きい。

８年のうちに孤児たちのうち何人かは王都へ進学や就職で出ていき、また新しい子どもはがやってきたりで人数は増減しながらも、村の人々は温かく若き女性僧侶と子どもたちを見守っている。

「雨が・・・・・・」

教会の庭で洗濯物を取り込んでいた僧侶は湿り気を帯びた風の匂いにその手を早めた。
腰まで伸ばされた優しい恋の色をした髪で作られたポニーテールと、くるぶしまである生成りのトゥニカ（ワンピース）、その上の紺色のスカプラリオは風に煽られて翻る。

６人分全てを取り込んで教会に入ろうと扉のノブに手をかけたところで、後ろから声をかけられた。

「マァムか？」

僧侶ーーーマァムは目を見開いた。
そこには８年ぶりの懐かしいひとがいた。

「ヒュンケル・・・」

それから視線をゆっくりと彼の左手と、そこにしっかりと繋がれている小さな存在へと動かした。
綺麗な顔立ちをした男の子だった。

男の子は、私と目が合うと、とうさん、と呟き、ヒュンケルの後ろに隠れた。

マァムはその子に微笑んだ。

「もうすぐ雨が降るわ。中へ入って」

二人を教会内の自身の私室へ案内し、洗濯物の後片付けを子どもたちに頼むと、マァムは子供用のおもちゃと、ミルクとコーヒーをそれぞれ一杯ずつ持って私室に戻った。

「ミルクは好き？」
椅子に行儀よく座っていた男の子がヒュンケルを見上げると、ヒュンケルは小さく頷いた。そして男の子はやっと、はい、と返事をした。

マァムは目を細め、丸テーブルの男の子の前にミルクを、そしてヒュンケルの前にコーヒーを置いた。

「私はマァムと言うの。あなたのお名前をきいてもいい？」

男の子はまたヒュンケルを見上げ、彼もまた無言で頷いた。

「リクシーです」
「とてもいいお名前ね」

リクシーは少しきょとんとしたが、すぐにふにゃりと笑った。自分でも気にいっているのだろう。

笑顔で顔が崩れても、リクシーはとても綺麗な顔をしていた。けれど顔の美しさよりも目を惹いてしまうのは魔族特有の形質だった。

おそらく母親が魔族なのだろう。

マァムが子供用のおもちゃを渡すとリクシーは少し遊んでいたが、やがてぐずりはじめた。

するとヒュンケルは立ち上がり、リクシーを抱き上げた。そのまま小さな背中をトントンと叩きながらマァムに背を向けてゆっくり揺れる。

「すまない。今日は昼寝をしていなくて」

その光景にマァムは目を見開いた。
心臓が大きく跳ね、足が震える。
いくつかの「思い」が突然沸き起こり、うねりをあげ、身の内を暴れる。マァムはそれを必死に胸に抑え込み、テーブルの下で手を握り込むと何度も深呼吸をした。

彼女にとって幸いなことに、リクシーを寝かしつけるのにヒュンケルは手こずってしまった。おかげで健やかな寝息が聞こえる頃には、マァムもだいぶ落ち着くことができた。

マァムは自分のベッドを軽く整え、そこにリクシーを寝かせるよう促すと、ヒュンケルは小さな体をゆっくりとそこに横たえた。

「ここに来たのは彼を預かってほしい、ということでいいのかしら？」

お互い椅子に座ったところでマァムが切り出すとヒュンケルは頷いた。

「アバン先生からお前がここで孤児を育てているとは聞いていた。オレの生活では子供を育てられない。お前に頼みたい」
「そう、先生から聞いていたのね」

アバンの使徒たちの絆は相変わらず健在ではあるが、日常的に情報をやり取りするのは割合筆まめなアバンとマァムくらいだった。他の四人は多忙だったり、性格ゆえにアバンからの情報を受け取るだけのことが多かった。

そのアバンからの情報によると、ヒュンケルの戦闘不能と言われた体は全盛期の半分程度には回復し、パプニカ周辺に出没するモンスターを退治したり、何かしらの異変があったときの斥候として東奔西走しているらしい。

「誰か信頼できる人に、と思ったときに、お前の顔が浮かんだ」
「・・・本当にリクシーが大切なのね」
「ああ」

微笑んだヒュンケルの表情は父親のそれだった。
泣きたくなる思いをマァムは必死に押し殺す。

「彼のお母様は？」
「病気で亡くなった」
「・・・安らかな眠りを」

マァムは十字を切った。
ヒュンケルに安らぎを与えてくれた女性。
彼と息子を置いて逝かねばならなかった無念は想像を絶する。

「できるだけ顔を見に来ようと思っている」
「いつでも歓迎するわ」
「よろしく頼む」
「え？」

用件を言うだけ言って、席を立とうとしたヒュンケルに、マアムは思わず立ち上がった。

「もう帰るつもり？」
「ああ」
「見損なったわ、ヒュンケル！」

マァムはバン、と机を叩いた。

「いい？リクシーが起きたときにあなたがいなかったらどう思うと思う？少し慣れるまでここにいてあげてもいいじゃないの！せめて三日間！それが父親ってものでしょ！」

再びバン、と机を叩いたマァムにヒュンケルは目を丸くしていたが、すぐに相好を崩した。

「何がおかしいのよ！」
「いや、今になってポップの気持がわかった」
「え？」
「お前にこんなふうに正論を突きつけられたら、従うしかないな」

ヒュンケルにそう言われて、確かに彼に対してこんな言い方をしたことがなかったことに気がついた。

「あの、生意気なことを言ってごめんなさい」
「いや、謝るのはオレの方だ」

（あぁ・・・この感じ・・・）

ヒュンケルの微笑みに、時が遡るのを感じた。それはまるで神の御手で時計が巻き戻されるように。
それも体を重ねながらも心に触れられることを拒まれたあの苦しい恋の日々ではなく、それ以前の兄弟子として優しく包んでくれていた時代に。

「では三日滞在する。宿はどこにある？」
「この村に宿はないわ。あるとしたらここよ」
「この教会に？」
「ええ。旅人はみんなここに泊まるのよ」
「そうか・・・」

ヒュンケルは急に何かを考えているようだったが、やがてマァムに向かって言った。

「ではご夫君にご挨拶をさせていただきたい」
「ゴフ君？」
「妻の知り合いとはいえ、男が突然宿泊するのは気持がいいものではないだろう」
「え〜っと・・・」

ヒュンケルが何を言っているのかわからなかった。けれど話の流れからどうやら彼が勘違いをしていることがわかった。

「私、独身よ」
「離婚したのか？」
「結婚したことなんてないわ」
「そうなのか？すまない・・・」

目を丸くし、語尾が消えていくヒュンケルにマァムも苦笑いを浮かべた。

「本当に申し訳ない。幸せな結婚をしたと聞いたいたんだ」
「アバン先生そんなことをいってたの？」
「いや、風の噂で」
「それ、一番あてにならない情報源よ！聞いちゃだめよ」
「わかった」

頷いたヒュンケルにマァムは微笑んだ。
大魔王バーンを倒した自分たちを人々は様々に噂した。けれどヒュンケルの噂は聞くに耐えないものが多かった。

人々には大魔王を倒した一行の一員であるヒュンケルへの感謝はある。だがそれだけではない。たとえパプニカ女王レオナが赦したとしても、失われた生命は戻らず、恨みは消えることはない。恨みはいつしか悪意ある噂になっていた。

そんな噂をマァムはヒュンケルの耳に入れたくなかった。

「さてと」
マァムは椅子から立ち上がった。
「リクシーが起きるまでそばにいてをあげてね。私は晩御飯の準備をしなくっちゃ」
今日はシチューよ、と笑いかけたマァムの名をヒュンケルがためらいがちに呼んだ。
「マァム」
「なあに？」
「あんな形で出ていって、すまなかった」

不意の謝罪にマァムの顔から笑みが剥げ落ちた。

それは、ヒュンケルがマァムの元を去った日のことに他ならなかっ

た。

さよならも言わず、彼は去っていった。置手紙には「すまない。やはりオレではお前を幸せにできない」とだけあった。それから８年、何の音沙汰もなかった。

「まったくよ」
マァムは再び笑った。笑う以外にどうしていいわからなかった。

「辛かったわ。でもあの時あなたが去ったから、今のあなたの『幸せ』を見つけたのなら、それでいいと思っているわ」

マァムは扉を閉めると、台所には行かず、聖堂へ向かった。この時間は誰もいないはずだ。

「神様・・・！」

いつの間にか空を支配していた雨雲は、昼下がりの太陽を覆い隠し、常ならば清らかに聖堂に差し込むステンドグラスの光は届かない。
雨音の鳴り止まぬ聖堂で跪きながら、マァムは先程のヒュンケルの背中を思い浮かべた。

何度も自分を守ってくれた背中だった。
何度も見送った背中だった。
行かないで、そばにいて、と伝えられなかった背中だった。

それなのに先程の背中は幸せに満ちていた。
子供を揺らすたびに見え隠れする横顔は穏やかそのもので、マァム
が初めて見るヒュンケルの表情だった。

自分が触れられなかった彼の心を、誰かが触れ、優しく慰め、それ
は受け入れられたのだ。

神は祈りを聞き届け給うた。
それなのに。

胸の奥でもう燃えることのない埋み火になっていたはずの何かが、
爆ぜ、心を焼く。

息をする隙に、唇から嗚咽が一つ溢れると、もう抑えることができ
なくなった。

地獄の業火もかくや、と思うほどの痛みにマァムは倒れ込む。

慟哭は雷鳴が隠してくれた。

その人（マァム）はオレの最初で最後の女性（ひと）だ。
激情に駆られて手折ってしまったその花はそれでもこの上なく幸福
そうで、劣情を孕んだこんな感情でも愛と呼べる代物だと教えてく
れた。
けれど自分はどこまでも咎人だった。死ぬまで安寧の地はなく、や
がて彼女をも巻き込むと思ったとき、彼女を置き去りにした。

それからはその選択は正しかったと自分に言い聞かせながら生きている。

「じゃあ午後は適当に村をお散歩してきてね。
　あ、私がアバンの使徒ってことは村長様しか知らないから、そのあたりよろしくね」

昼食の後、笑顔のマァムに送り出されたヒュンケルは村を一人歩いていた。
昨日村に到着してすぐに降り始めた雨は雷鳴を伴うものの変わったが、それも一時のことで夕食の前にはすっかり上がっており、石畳はすっかり乾いている。

（やはりマァムに任せてよかった）

ヒュンケルは久しぶりに空になった左手を見た。
初めて会った時からリクシーはヒュンケルの手を離すことを拒んでいた。

朝食時もヒュンケルの傍らから離れず、慣れるのに時間がかかるかもしれない、と思っていたところ、マァムに今日はリクシーの歓迎のピクニックに行きましょう、と告げた。

季節はちょうどひなげしの頃。
暁の色をそのままその身に移したような花の頭を薫風が優しく揺らす。
それをかき分けるように子どもたちが走りまわっている。
追いかけっこや花を摘んだりしてしている子どもたちの笑い声を聞いていたヒュンケルは、繋いだ手の先の小さな存在がそわそわしているのを感じた。

「お前も遊びに行くか？」
リクシーは頭を横に振った。だが彼が遊びたいのはヒュンケルにもわかった。

その様子を見ていたマァムが側にいた女の子に何やら伝えると、その子がこちらに走ってきて、リクシーへ手を差し出した。

「一緒にあそぼう」

リクシーはヒュンケルを見上げ、彼が頷くと女の子の手を取った。
ずっと繋がれていた手が、幼子自身の力で解けていく。ヒュンケルにはそれがたまらなく寂しく感じられた。

（意外とあっけなかったな）

ヒュンケルと離れても大丈夫と判断したらしいマァムは、彼に昼食後少し姿を消すようにいったのだった。

ピクニックをしていた丘から少し降ると、すぐに村の中心地についた。
小さいながら、本当に美しい村だとヒュンケルは思う。

特産だという煉瓦を積み上げた壁を、濃い緑の蔦が青空に向かって這い、白や紫や赤や青といったそれぞれ思い思いの花を咲かせている。

さて、これからどうしようかと思ったとき、老人の声が聞こえた。

「客人殿」

知らぬ声に通りすぎようとすると、老人は声を張り上げた。

「昨日教会のマァム殿の部屋に泊まった客人殿！」

今度は振り返らないわけにはいかなかった。

「小さい村ですから、退屈でしょう。お茶でもいかがですかな？」

事実、昨日は結果的にそうだったのが、その言い方ではマァムの名誉に関わる。にっこりと笑う老人に、ヒュンケルはついていかざるを得なかった。

老人ーーー彼が村長だったのは後で知ったがーーーに連れていかれた先は村長の庭であった。手入れが行き届いた庭には飲み物とお菓子が載せられたテーブルが置かれており、そこに十人程の村人がヒュンケルの登場を待ち構えていた。
ただし、にこやかな村長と美しい庭には不釣り合いなひどく剣呑な表情を浮かべながら。

「なるほど、お連れになったお子様がマァム様のお部屋で寝てしまったから、そのままお部屋で、マァム様が客室で休まれた、というわけですね」

友好的とはいえない、というより自分に対して警戒心を持っているのがありありと伝わってくる場で、ヒュンケルが勧められるがままに椅子に座ると、村人たちは詮議でもするように質問を投げかけていく。

「でも、新しい子が来るときって、マァム様はだいたい礼拝堂に案内されるんです。失礼ですが、どういうご関係なのでしょうか？」

ここに着いてから遠慮なく聞いてくるのは四十代くらいの牛飼いの妻だ。彼女が朝教会に牛乳を届けに行ったときに、子どもからマァムの私室に男がいたと聞いたらしい。

兄弟子、と言いかけてヒュンケルは止めた。兄弟子と名乗れば、マァムがアバンの使徒であることに行きつく話になるかもしれない。

「兄、のようなものです」
「あに、のような？」

それからヒュンケルは口をつぐむことにした。

たとえば地方の警備隊では対応できないような強力な魔物が出現したとき、ヒュンケルは女王レオナの指示で派遣される。その土地の人々は最初戦士の到着に安堵するが、ヒュンケルの名を聞くとそれが不安に変わる。もちろん、彼の実力を疑問視してではなく、討伐されるのは魔物ではなく自分たちではないかという恐れからだ。

だからヒュンケルはこの種の視線にはただ粛々と敵を倒し、余計なことは喋らずに、討伐が終われば直ちに帰ることで対応している。

ヒュンケルは腕を組むともうこれ以上聞いてくれるなと目を閉じた。

彼が押し黙ったことで、村人達は二の句が継げなくなってしまった。
ヒュンケル自身はあまり自覚していないが、何度も死線をくぐり抜けた人間はそれだけで凄味がある。その彼がこれ以上の会話を拒否しているのだから、村人たちは一様に、とりわけ牛飼いの妻は特に青ざめた。

空気が冷たく停滞したときに、口を開いたのは長老だった。

「ほほほ。そうか、兄君でありましたか」

のんびりした声に、村人たちの意識が集中する。

「兄君、突然こんなところに連れてきて、質問攻めにして申し訳なかった。お詫びしよう。この通りじゃ」

深々と頭を下げる長老にヒュンケルは面食らった。

「いえ、私こそ邪魔して申し訳ありませんでした」

頭を垂れた長老にヒュンケルが頭を上げるように告げると、長老は顔を上げ、顔に刻まれた皺を更に深くして笑った。

「お優しい兄君、こちらの非礼、全てマァム殿を心配する気持ちか

らのこととご理解いただければありがたい」

長老の言葉に、村人たちは弾かれたように次々に頭を下げ始めた。

「そ、そうなんです！私たち、マァム様が心配で！」
「だって、あんなにお綺麗でお優しいでしょう？だから不埒者がお部屋に忍び込んだのか思って」
「しっかりした方だけど、根が素直なところがあるから、騙されやすいというか」
「初心なところもあるから、その、心配でいろいろ想像を・・・」
「泥棒が入っても私のほうが強いからって笑っちゃう方だから・・・」

慌てて謝罪をする村人たちにヒュンケルは目を見開き、自身も気が付かぬうちにマァムへの思いの欠片が零れた。
すなわち、微笑んだのだ。
そして村人たちにはそれはまるで長く凍っていた湖の雪解けの水の雫のように煌めいてみえた。

「・・・マァムはここで愛されているのですね」

マァム、と呼ぶ声には先程とは打って変わって甘い響きがあった。
花の蜜を思わせるようなその声音に女性たちは頬を染める。

「ええ、もちろんです。マァム殿がこの村に来られた頃は、孤児が多くいた時代でした。本来であれば我々大人がしなければいけなかった仕事を二十歳前の若さで引き継いでくださったマァム殿を我々は敬愛し、大切に思っているのですよ」

僅かに目元をほころばせたヒュンケルに長老はお茶を差し出した。
ヒュンケルに初対面の相手に勧められたものを口にする習慣はない。だが彼は礼を言い、それを一口飲んでみせた。

「兄君、マァム殿はとても頑張っておられるのですよ。あとで誉めてあげてください。彼女が孤児院を引き継いだ当初はそれはそれは心配したものです。
最初にマァム殿を手伝い始めたのは彼女なんですよ」

なあ、と長老が振り向いたのは牛飼いの妻だった。自分がヒュンケルの気分を害したと思っている彼女はすっかり固くなってしまっている。
その様子にヒュンケルも申し訳なくなった。居住まいを正すと努めて友好的に振る舞うことにした。

「御婦人、マァムへのお力添え、深く感謝いたします。マァムを誉めてやりたいので、お話をもっとお聞かせ願えませんか？」

その騎士然とした振る舞いは、村人たちの警戒心を霧散させ、ヒュンケルを信頼するのに十分なものであった。

期せずしてヒュンケルはこの村でのマァムの風評をマァム以上に知ることになったのである。

ヒュンケルが村長の庭を辞したのはそれから二時間ほどしてからだった。
ピクニックをしていた丘に向かうと、子どもたちの明るい声が聞こえた。それにいざなわれるように歩いていくと、そこにマァムの姿

があった。

もう少しで夕日になりそうな、穏やかな光の中で、ちょうどマァムがリクシーを抱き上げている。

子どものひとりがこちらに気が付き、指をさした。

その指先を追って、子どもたちに向けられていたマァムの顔が、こちらに気づいて振り向く。
そしてヒュンケルを見つけると、太陽の欠片が煌めくように笑った。その煌めきは光のプリズムとなって世界を鮮やかに染めあげていく。

「おかえりなさい！
　そろそろ夕飯の準備するね」

それはヒュンケルが何よりも渇望していた光景。
この光のためなら何を捨ててもいいと思うほどに。

ーーーやはり俺の選択は正しかった。

鮮やかな光の中で、ヒュンケルだたひとりはその光を恋いながらも、見つめていた。

その晩、リクシーが教会の客室で安らかな寝息をたてはじめてしばらく経ったころ、ヒュンケルはドアの前に誰かが立つ気配を感じた。

ノックされる前にヒュンケルがドアを開けると、お盆にロウソクと酒瓶、酒器を載せたマァムが立っていて、さすがね、と笑った。

ヒュンケルが入室を促すと、マァムは静かに入り、机の上に酒瓶と酒器を置いた。

その姿にヒュンケルは思わず目を背けた。
昼間の一分の隙もない僧侶としての姿も、その下の柔らかさや香りを知るヒュンケルにはかえって背徳的な色香があった。
そして今は質素な生成りのワンピースの寝衣だ。ふんわりとはしているものの、微かにのぞく鎖骨や、そこから胸の頂上へ向かっていく急な傾斜、ふとした動き度に現れる背中と腰のラインや裾から見えるきゅっと締まった足首といった部分が、女性としての艶やかさを慎ましやかに主張し、悩ましかった。

「これ、村長様から。本当は夜も一緒に飲みたかったらしいんだけど、もしかしたらリクシーが夜起きるかもしれないから部屋で楽しんでほしいって」

マァムは幼子が眠る側へ行き、屈んで背と額に汗をかいてないか確かめた。そして大丈夫だと確認するとそのままベッドの脇に静かに腰掛ける。そのせいでわずかに上がった寝衣の裾からのぞく脚を見ないように、ヒュンケルは視線をずらした。

「どう、この村は？」
「素晴らしいな」
「そうでしょ！」

ヒュンケルの返事にマァムは満面の笑みを浮かべた。

ヒュンケルは最初、マァムがこんな片田舎で暮らしていることを不服に思っていた。

大戦を戦い抜き、人々に平和をもたらした勇者一行のひとりであるマァムがなぜこんなところに追いやられなければならないのか。
それがかつて悪に身を染めた自分ならわかるが、彼女は違う。
マァムは人々から敬愛され、豊かに穏やかに、勝ち取った平和を享受する資格があるし、その容貌や実績、それにそのひととなりを知られれば、貴族や王族にでも望まれるはずなのに。

だが想像していたよりずっとこの村はいい。
優しい村人たちからのあたたかな敬愛。
子供たちからの無垢な信頼と敬慕。
美しい村での華美ではないが心豊かな生活。

想像していた図とは違っていたが、この村はヒュンケルが望んでたことがほとんど満たされていた。

「大切な者を任せるのに理想的だ」

ヒュンケルの言葉にマァムは幼子に視線を移した。彼女にとって、ヒュンケルの大切な者はもうこの小さな男の子だったから。
そしてためらいがちに口を開いた。

「あの、今日話していて気が付いたんだけど・・・今から聞くこと、気を悪くしないで聞いてくれる？」
「なんだ？」
「リクシーの、最初のお父さん（・・・・・・・）って、まだご存命なのかしら？」
「いや、亡くなったと聞いている」
「そう、わかったわ。ありがとう」

リクシーはヒュンケルが斥候中に見つけた子どもだった。
それを伝えてはいなかったが、リクシーに対しての自分の愛情は本物であり、もともとアンデットに大切に育てられたヒュンケルにとっては、その絆は血の繋がりよりも強いもので、殊更血縁を説明するののでもないと思っていた。

だが、マァムの躊躇している理由を考えたときに、彼女がリクシーを、ヒュンケルと誰かの愛の結晶、ないしはヒュンケルが愛した女性の忘れ形見だと勘違いしていることに思い至った。
それはつまりマァムにとっては、かつて愛した男が他の女性との間にできた子どもの養育を依頼してきた、という構図だ。
ヒュンケルはようやくそこに気がついた。

「母親は、オレが見つけたときにはすでに息絶えていた。リクシーにとうさんと呼ばれて、父を思い出したんだ。・・・すまない、他からみて、自分たちがどういう関係と思われるか、気がつかなかったんだ」

説明をしようとすればするほど、なぜか苦しい言い訳のように言葉が紡がれていく。そんなヒュンケルにマァムは口端を上げて笑顔の形を作ってみせた。

「うん。あなたにとって、バルトスがどんなに大切な存在だったかは、知っているつもりよ」

ヒュンケルは焦った。先程までにこやかに話していたマァムの心がなぜか離れていってしまう、そう感じていた。

「ここではね、本当のお父さんとお母さんがいつか迎えに来てくれるかっていう情報って重要なの。だから確認しただけよ」

マァムはそう言うと立ち上がった。

「・・・先に説明していなかったことで、お前を無駄に傷つけてしまったなら、申し訳ない」
「ううん、全然。些細なことよ・・・」

ありがとう、じゃあ、おやすみなさい、とマァムがドアノブに手をかけ、部屋から出ていこうとしたとき、ヒュンケルは咄嗟に彼女の腕を取った。
記憶の中のものより柔らかいその腕に少し驚いた。

「オレからも聞きたいことがある」
「・・・何かしら？」

マァムは取り繕ったような笑顔を貼り付けたままだ。
そのことも気がかりだが、ヒュンケルには絶対に聞いておかねばならないことがあった。

「・・・ここにいる子供たちの親は、オレが、不死騎団が殺したのか？」

マァムは目を見開き、貼り付いていた偽りの笑顔が消えた。それから困った子を見るように今度はふわりと笑った。ここに来てからヒュンケルに向けられた表情の中で一番慈しみ深い表情は何よりも雄弁に語る。

答えは是だと。

「座っていい？」
ヒュンケルが頷くと、マァムはドアから離れ、椅子に腰掛けた。
ヒュンケルもまたその対面に座った。

ずっと疑問だった。
なぜ彼女が故郷に帰らず、パプニカにとどまっているのか。

それが村長が言っていた、マァムが来た時には孤児が多かったという言葉と繋がった。
孤児が多くなるような出来事、それは戦争か疫病か天災だ。だがこのパプニカにはこの十年ほど疫病も天災もなかった。
あったのは魔王軍不死騎団による侵攻だった。

「今いる子のうち、２人がそうよ」

ヒュンケルの罪の結果を告げるマァムの声はまるで静かな湖面のように静かで漣ひとつない。

「約束してほしいの。あなたがかつて、そうであったとことは決して口にしないと。これはあなたのためじゃなくて、子供たちのために」

無言で頷くヒュンケルにマァムは安心した。
告白して赦しを乞うほうがどれほど気が楽か。しかし少なくとも子供たちが子供であるうちは、赦しを与えるか与えないかの選択をさせるべきではないとマァムは思っている。

「結局オレはお前をオレの罪に巻込んでしまったのか」

拳を握りしめ肩を戦慄かせるヒュンケルに、ああまた苦しんでいる、とマァムは思った。

「違うわ」

この人はこういうところがある。
自分は他人を幸せにできないと、不幸にするだけだ、と頑なに信じていた。

マァムはヒュンケルから視線をずらし、酒瓶を眺めた。

「私ね、あのあと何人もお付き合いした人がいたのよ。でも全部振られちゃって失恋して、神様にすがったの。古典的でしょ？」

それはたった今思いついた嘘。
彼の罪悪感を否定するためだけの、薄っぺらい嘘だった。

だからヒュンケルにもそれが嘘であることはすぐにわかった。

「そんなわけがあるわけない」
「それがあったのよ」
「お前を欲しがらない男がいるわけないだろう」

その言葉に、マァムから表情が抜け落ちた。
ヒュンケルは言ってから後悔した。少なくとも、自分が言っていいセリフではなかった。

しかし表情が抜け落ちたと感じたのは僅かな間のことだった。またたく間にマァムの瞳が涙で盛り上がっていく。
かつて甘い優しさをを湛えていた瞳が、今は雫をめいいっぱい抱えているようで、なぜ零れないか不思議だった。
だがもう溢れる、と思ったときに、涙の代わりに唇から小さな声が溢れた。

「ここに、いるじゃない・・・」

ヒュンケルは何も言えなかった。
置手紙一枚を残して、彼女から去ったのは自分だった。
真意がどうあれ、彼女にとっての事実はそうなのだ。

マァムは立ち上がった。
そして、目に涙を溜めたまま、力なくヒュンケルに笑ってみせた。

「だけど、わかるでしょう？私が今とても幸せだって。申し訳ないけど、あなたとお付き合いしていた時より幸せよ」

マァムの瞳には怒りはない。
ただ、悲しみだけ。

マァムは身を翻し、部屋から出ていった。
引き留めようとしたヒュンケルの手は届かず、去っていく足音は遠ざかっていく。

残されたヒュンケルはひとり頭を抱えることしかできなかった。